

競争と公平感 —市場経済の本当のメリット—

大竹文雄著 中央公論新社 2010 (中公新書)

商学部准教授 計 聡

七、八年ほど前に中国を訪れたとき、ある中国の知人から「日本は本当に資本主義の国で、市場経済ですか。」と聞かれたことがあります。突然に飛び込んできたこの質問に如何に答えるかは、幾分躊躇した記憶があります。われわれは資本主義の社会のなかで暮らし、市場経済機構のもとでの営みは当然のように思えますが、なぜ外からは違うように見えてくるのでしょうか。あるいは社会主義計画経済を経験してきた中国人が市場経済について日本人と異なった認識を持っているのでしょうか。

「競争と公平感」で著者は、これらの疑問に明快に答えてくれます。この本によれば、市場競争を嫌いながらも政府による再分配も嫌う日本人が他の国に比べて多い。また、多少貧富の格差があっても、自由経済によりよくなると思う人が多くなればよいと思う人の割合は他の先進国に比べて低いそうです。一体、なぜそのような違いが生まれてくるのでしょうか。

著者は日本社会が抱えている現実の経済問題を取り上げ、国際比較データを用いた経済学的分析だけではなく、政治、文化、宗教そして不況という時代背景の中で変わりつつある人々の価値観も念頭に入れて幅広い分析をおこなっています。このような切り口もふくめて実に興味深い書物です。これから変化し続けていく社会のなか、自由な市場経済を如何に正確に理解し、そしてそのメリットを如何に生かし、誰もが本当の公平感を感じるような、より豊かな人間社会を構築していくためには何が必要かを考えるために大変有益な一冊だと思います。



意識の形而上学 —『大乘起信論』の哲学— 東洋哲学覚書—

井筒俊彦著 中央公論新社 2001 (中公文庫)

商学部准教授 鈴木 健郎

井筒俊彦氏は、ユダヤ神秘主義、イスラム神秘主義、朱子学、老子、荘子、禅、唯識思想などを縦横に論じて「東洋哲学の共時的構造化」を追求した「意識と本質」(岩波文庫)などの著作で有名である。本書も、仏教経典「大乘起信論」を「読みなおし、解体して、その提出する哲学的問題を分析し、かつそこに哲学思想的可能性を主題的に追った」著作である。「存在論的視座」、「存在論から意識論へ」、「実存意識機能の内的メカニズム」の三部構成で、「真如」「アラヤ識」「空」などの仏教用語を分析しながら、世界の存在と意識と言語に関する形而上学、それを基盤とする実存の問題を明快に論じている。

このように書いてくると、とんでもなく難しい本だと思いかもしれない。実際のところ難しいのだが、一方で非常に難解な仏教経典を、これほどわかりやすく論理的に解説した本はめったにないといえる。東洋思想は面白そうだが難しそうだと思っている人は、この本や「意識と本質」、そして「荘子」「老子」(専門書から文庫までたくさん出ている)やインド哲学の入門書などを、わからないところがあってもかまわずに同時並行的に読んでみると、いろいろと面白い発見ができるだろう。

一生かけて考えるような問題をじっくり考えてみたい人にはお勧めである。